
僕がいて私がいて

万智

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕がいて私がいて

【Nコード】

N9838D

【作者名】

万智

【あらすじ】

もし、かけがえのない人が突然いなくなったら…。そんな不安は誰にもあるはず。

もし僕が、君の前から突然いなくなってしまったら、君はどうするだろうか。

泣き虫で甘えんぼな君は、僕がいなくても生きていけるだろうか。

仕事を終え帰宅途中の電車の中、無邪気に笑う妻を見て、いつかそんな事を思ったのを、僕はぼんやりと思い出していた。

都内から約一時間。終着駅が近くなると人も少なく、座席も空き始めていたが、僕はドアに寄り掛かり外の景色を眺めていた。朝の天気予報の通り、外は羽毛のような雪が降り始めていた。

やがて、電車は最後の駅に着いた。改札へと向かう人の流れに乗り、改札を抜けたところで僕はその流れから抜ける。

皆と一緒にそのままバスターミナルでバスに乗り、五つ先の停留所まで行けば家に着くのだが、家に帰る前に寄る所があった。駅から五分ほど歩いた所にある白い建物。この辺りでは一番大きな病院だ。病院に着くと傘に積もった雪を払い、足早に受付を通り過ぎてエレベーターのボタンを押す。

エレベーターの扉はすぐに開いた。きつと誰かが降りてきたばかりなのだろう。面会時間は後一時間しかない。僕は急いでエレベーターに乗り三階まで上がる。

エレベーターを降りると左手前から奥へと部屋が並び、右側にナースステーションがある。看護婦さんに軽く頭を下げると、僕は奥の部屋へと急いだ。

その部屋に表示された名前は高橋悠子。

僕の妻の部屋だ。悠子はこの部屋で、僕の帰りを待っている。扉を開け中に入ると、ベッドに横たわる姿が見えた。

「ただいま、悠子」

僕はベッドの横の丸い椅子に腰掛け、悠子の手を握りながら語りかけた。しかし、反応はない。

「おかえり」

と笑顔で答えてくれることもない。

悠子はこの一年の間、ずっと眠ったままだった。

あの日も雪が降っていた。突然の雪で傘を忘れた僕を、悠子はバス停まで迎えに来ていた。

車もタイヤを履き替えてなく、ゆっくりと慎重に走るものだから、たちまち渋滞してしまう。

なかなか前に進まない上、仕事帰りの疲れも重なり、眠気をこらえる一人の男。前の車が少し進んだのに気付くとアクセスを踏む。意識がハッキリしないため少し強く踏み過ぎた。前の車にぶつかる寸前で慌ててハンドルを左へ切るが、その先には僕をバス停で待つ悠子の姿があった。鈍い音と共に悠子の体は白い地面に叩き付けられ、頭部を中心に赤い色が徐々に周りを囲んでいった。

僕はその時、二つ手前のバス停を過ぎた辺りにいた。混雑する車と車の間を慎重に通り過ぎる救急車に、まさか自分の妻が乗せられていたなどと考えもしなかった。

警察から電話があったのは、やっとの思いでバスを降りて雪まみれになりながら自宅へ辿りついた直後だった。

雪で濡れた服もそのまま、僕はすぐに家を飛び出し、長い車の列の中にタクシーをみつけて乗り込む。運転手に事情を話すと、最短の方法を考慮しながら病院へ向かってくれた。タクシーの中で僕が震える肩を抱き締め俯いていると、運転手が何度も励ましてくれていたが、何を言ってくれていたのか覚えていない。

失礼な話だが、それほど僕は気が動転していた。

タクシーが病院の前に付けられ、降りようとしたが足が震えて思うように動かなかった。フラフラとまるで自分が病人のように受付まで行くと、看護婦さんが心配して手術室まで案内してくれた。長椅子に僕を座らせると、何処からか毛布を持って来て、僕を包むように掛けてくれた。そして僕の肩にほんの少しの間だけ手を置くと、余計な事は何も言わずに持ち場へ戻って行った。毛布はとても暖かだった。

手術が終わり、病室のベッドで眠る悠子の傍らで医師の話を聞いた。このまま目が覚めないかもしれない。そう言われたが、その時の僕はまだ実感がなかった。明日にはきっと、あの子供のような笑顔が見れると信じていたのだ。

あれから一年。

悠子は眠ったままだ。

「明日には目が覚めるかもしれない」

その希望はいつしか

「もう目を覚ますことはないかもしれない」という諦めに変わっていった。

僕はいつまで待てばいいのだろうか。

「少し…疲れたよ」

握り返すことのない手を握りながら、溢れそうな涙を必死でこらえた。

君に会いたい

もう一度あの笑顔がみたい

君に会いたい…

もし私が、貴方の前から突然に居なくなったら、貴方はどうするかしら。強がりでも寂しがり屋な貴方は私が居なくても大丈夫なのかしら。安らかな寝顔を眺めながら、いつかそんなことを思ったのを思い出していた。

私はいつからここにいるのだろう。辺り一面に霧がたちこめ、何処へ行けばいいのかわからないでいた。ふいに右手が暖かくなった。小さいけれど、どこかで貴方によく似た声がする。どこにいるのだろう。

貴方に会いたい。

暖かい右手を左手で抱き締めると、自然に涙が溢れてきた。私は目を閉じ、強く願う。

貴方に会いたい

そして目を開けると眩しい光が見えた。白い天井。白衣の人。どうやらここは病院らしい。目が馴れてくると貴方の顔がハッキリと見えてきた。涙を流す貴方の顔を私は初めて見た気がする。

泣き顔の貴方は私の右手をしっかりと握りしめていた。

そしてその手を、私の左手が震えながら覆っていた。

貴方は私の名前を叫んでいるようだけど、まだよく聞こえない。上手く力が入らない。大丈夫よ、私は戻ってこれたみたい。だから泣かないで。私は出来る限りの力を振り絞り、貴方にささやく。

「意外と…泣き虫ね…」

すると貴方の涙はますます溢れだし、私の頬にも涙が止まる事なく
つたっていた。
涙はとても温かだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9838d/>

僕がいて私がいて

2010年12月26日14時11分発行